

# 伊勢遺跡現地説明会資料（96次）

伊勢遺跡は、昭和54年に発見された弥生時代後期の大規模な集落遺跡です。平成4年9月、遺跡中心部から国内最大級の掘立柱建物が発見され、その後の調査によって計12棟の大型建物が見つかり、邪馬台国時代の有力なクニの中心部と考えられています。また平成14年には、王の住居と考えられる国内最大級の大型竪穴建物が見つかりました。今回の調査地点は、大型竪穴建物に隣接する場所にあたり、伊勢遺跡の東隅の様子が判明しました。

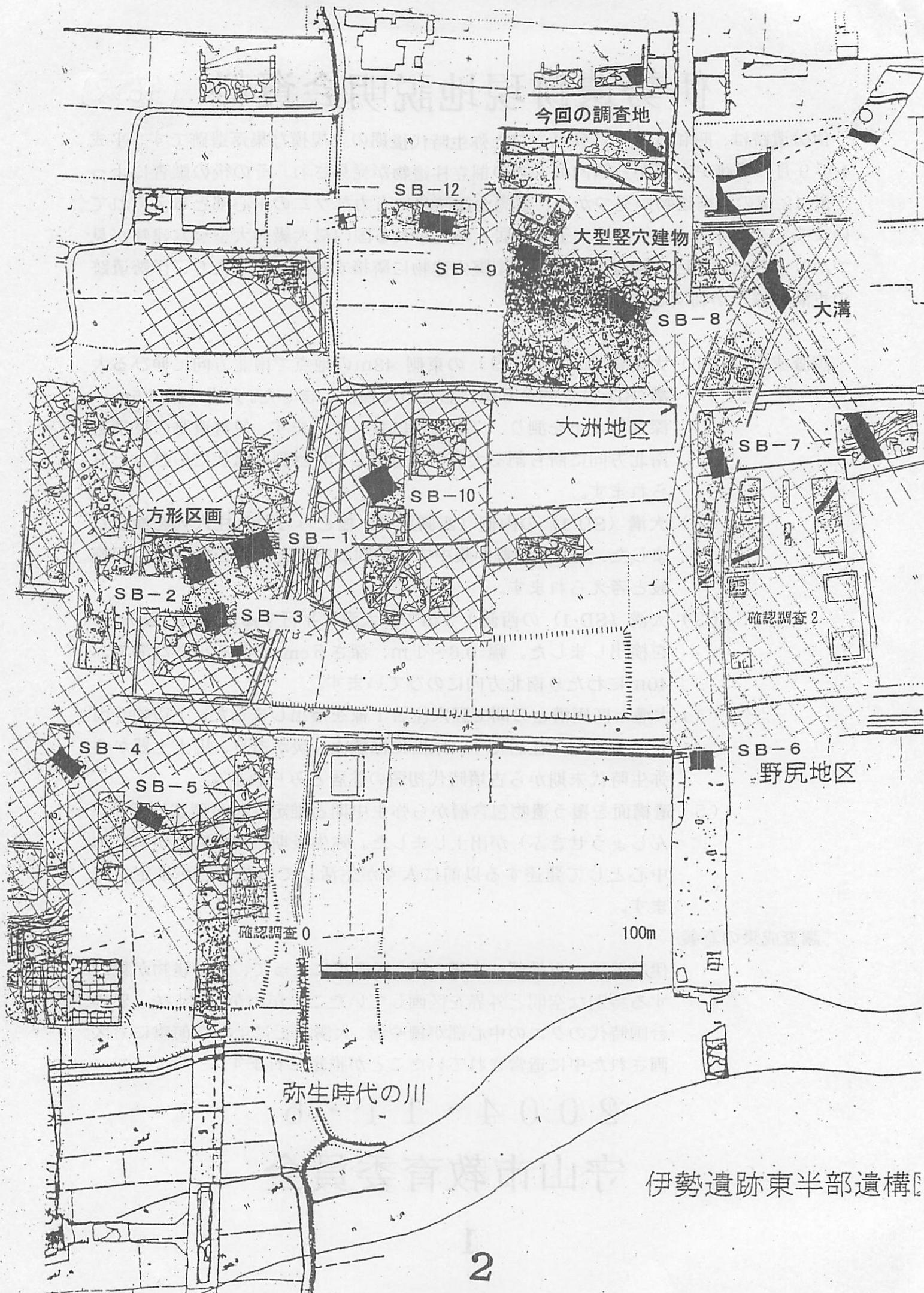
- 調査成果
- (1) 大型建物（SB-9）の東側43mの地点で南北方向に伸びる大溝（SD-1）を約20mにわたって検出しました。大溝は幅3.5m、深さ約1mを測り、二段掘りになっています。伊勢遺跡の東端を南北方向に断ち割る大溝から分岐し、北西側に弧状にのびるとみられます。
  - (2) 大溝（SD-1）の内側（西側）で、柵とみられる柱穴列を検出しました。大型建物群が集中する特別な空間と外界を区画施設と考えられます。
  - (3) 大溝（SD-1）の西側13mで、大溝に平行する区画溝（SD-2）を検出しました。幅0.6~1m、深さ5cmを測る小さな溝で、40mにわたり南北方向にのびています。
  - (4) 大溝と区画溝との間で竪穴住居1棟を検出しました。1辺約5mを測る小型の住居です。床面には焼土、炭があり、出土土器から弥生時代末期から古墳時代初頭の住居とみられます。
  - (5) 遺構面を覆う遺物包含層から弥生中期と推定される環状石斧（かんじょうせきふ）が出土しました。弥生後期、伊勢遺跡がクニの中心として発達する以前に人々が生活していたことが推定されます。

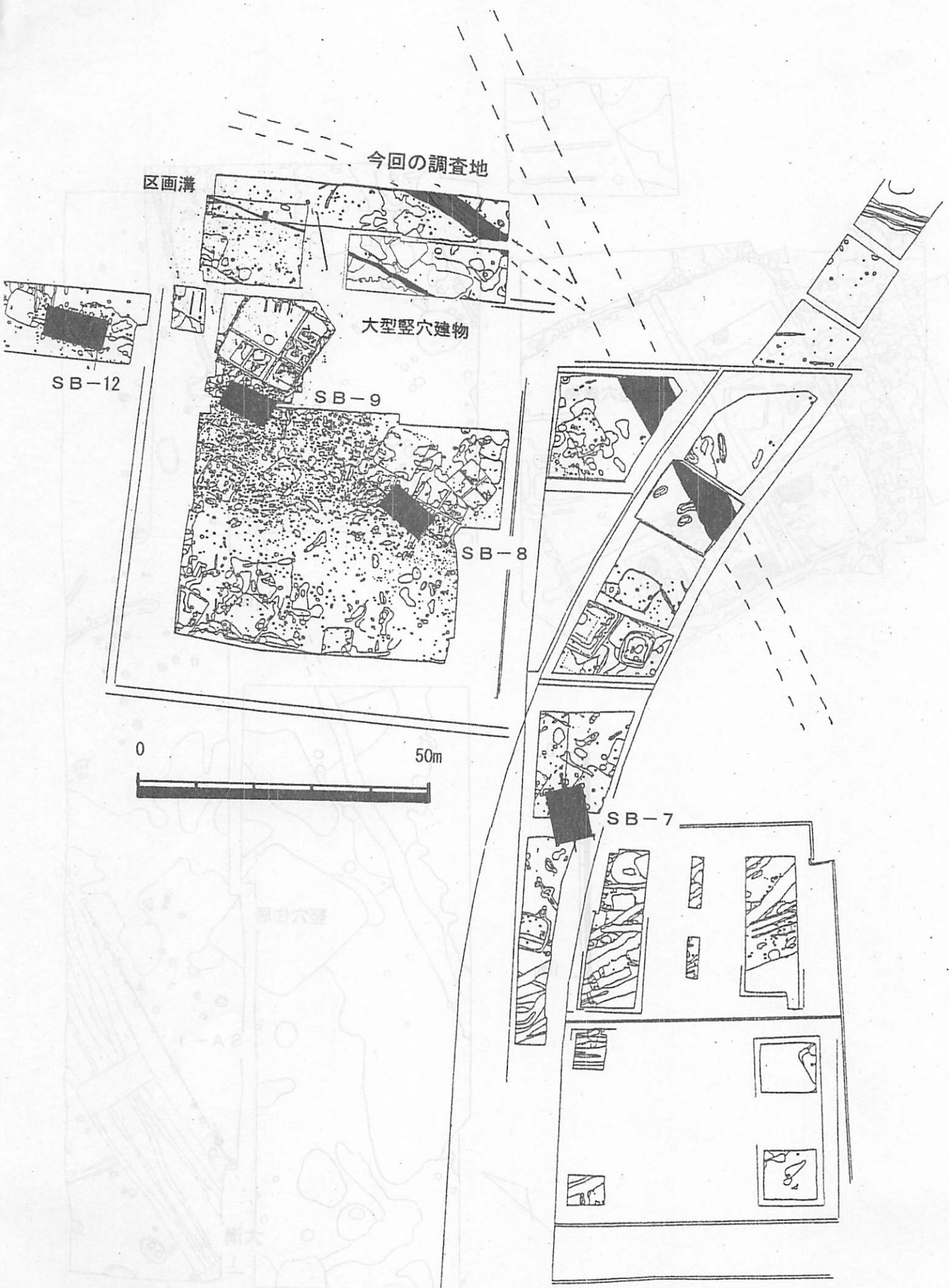
## 調査成果の意義

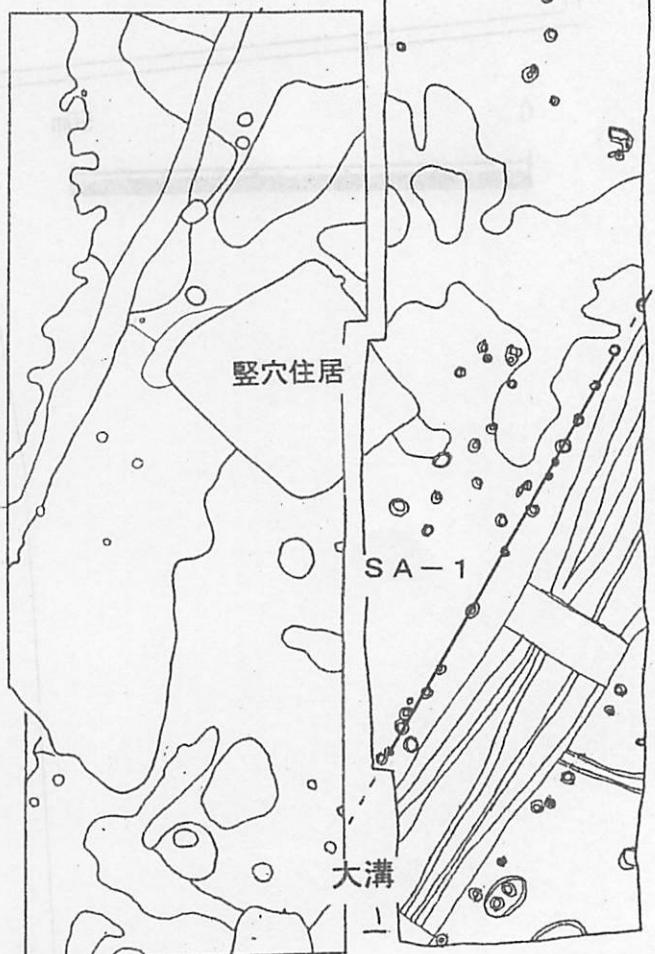
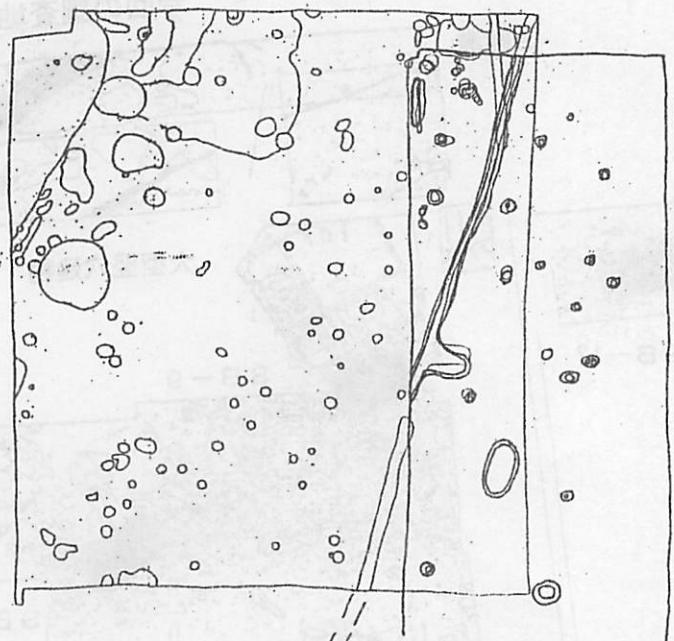
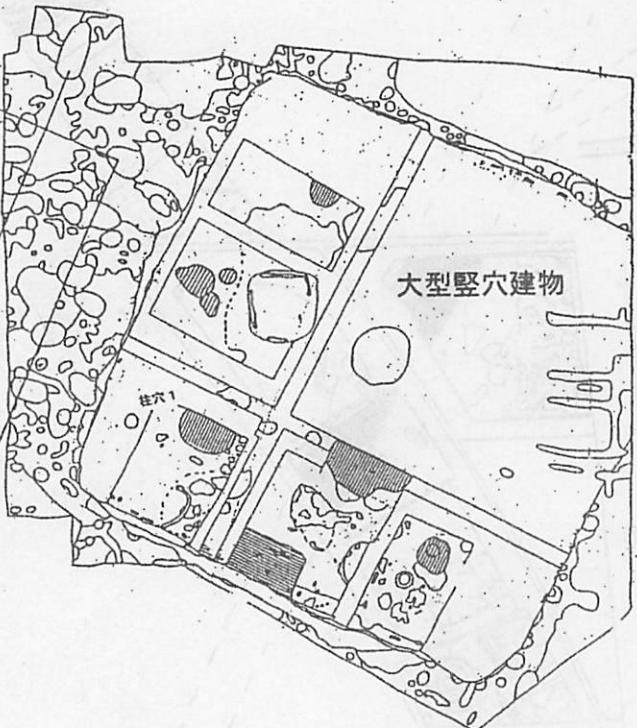
伊勢遺跡の東端部に大溝、柵、区画溝によって、大型建物が集中する特別な空間と外界を区画していたことがわかりました。邪馬台国時代のクニの中心部が柵や溝、大溝などによって何重にも区画された中に造営されていたことが推定されます。

2004・11・6

守山市教育委員会







0  
10m